

歴史を誤らせている

勝海舟神話

咸臨丸神話

—— 隠された遣米使節の業績 ——

東善寺住職
村上 泰賢



ワシントン海軍造船所を見学した遣米使節
前列右から二人目が小栗忠順



▲東郷平八郎

たように補給路を絶たれ、北歐諸国のように日本も属国とされていくことである。連合艦隊といえど、一見勇ましいが、敗れたら次の連合艦隊はない。皇国の

今年「明治維新一五〇年」ということで、全国でさまざまな記念行事が計画されている。内容で大別すると、戊辰戦争で犠牲になった人々を追悼する行事と、反対に明治維新の成果を誇示する企画になる。

歴史には継続性がある。明治以後に日本がいきなり近代化できたわけはなく、背景に二六〇年間戦争をしなかった江戸時代の平和が蓄積した文化・教育が生み出した国民の民度の高さがあった。そのことに目を向けず、あたかも明治以後突然変異のように日本がいつぱんに近代化したように教え、その反動で明治以前の江戸時代を旧弊・頑迷な時代とする教育が明治以来行われてきた。だから、いたずらに明治維新を美化する記念行事には注意しなければならない。

ここに取り上げた「勝海舟神話」「咸臨丸神話」は誇張脚色された勝海舟をヒーローとして成立させ、結果として幕末における日本人のまっとうな近代化の努力を覆い隠し、明治維新美化の風潮に貢献して歴史を誤らせている。

日本を救った横須賀造船所

東郷平八郎の謝礼

明治四十五年（一九一三）夏、東郷平八郎は自邸に小栗上野介の遺族小栗貞雄と息子又一を招いた。小栗忠順の孫又一は小栗道子夫人が会津に逃れて生まれた小栗の遺児国子の長男で、この時十四歳、中学生の年頃である。機嫌よく二人を

したことによって、改めて日本海軍草創の歴史に思いを巡らしたのではないだろうか。薩英戦争で痛い敗北を経験した東郷さんなればこそその感慨であつたろうと思う。そして思い出されたのが、横須賀村に造船所を建設した幕臣小栗上野介のことであつた」（小栗又一の長男忠人「日露戦争と小栗忠順」・小栗上野介顕彰会機関誌『たつなみ』十四号）

遠慮する貞雄とのやりとりの後ようやく上座に東郷が座つて落ち着くと、まず東郷は二人に礼を述べた。

「日本海海戦の勝因の第一に（明治）天皇の御威光の絶大なるものがあつたことをあげ、軍事上の勝因の第一として、上野介殿が横須賀に造船所を建設しておいてくれたことが、どれほど役立ったか計り知れませんが実に気持ちよく率直に、感謝の意を表されたと伝えられている」（小栗忠人・同右）

日本海海戦でバルチック艦隊に敗ればロシア海軍に日本海は制圧され、大陸に展開した陸軍は首根っこを押さえられ

迎えた東郷は、まず二人に上座に座るよう勧めた。

「東郷元帥は丸顔でいが栗頭一見したところ平凡素朴な風格であつた。元帥が応接間で、物静かに言葉少くはあつたが教訓され、柿のお菓子を一つづつ下さつた……」（小栗又一「緑の地大宮行」・『上毛及び上毛人』第二二〇号・昭和十年八月）

「東郷さんは後年、東宮御学問所総裁という地位に迎えられたくらい的人物だから、余程人格的にも優れた人であつたとみえて、ただひとり勝利にひたっていたわけではなく、勝利興廢此の一戦にあり」と言つた東郷の言葉は文字通りこの時の日本海軍の状況を表していた。横須賀造船所があつて日本は救われたと、東郷は言っているのだ。

横須賀造船所 ―幕府が終つても日本は続く―

小栗上野介が万延元年（一八六〇）の遣米使節の見聞をもとに、帰国後しきりに日本近代化のために造船所を建設することを主張したとき、いくつもの反対があつた。勝海舟も、「造船所は造れても人材がいなけりや船は動かない。欧米を見ろ、日本が追いつくには五百年かかる。人材教育が先だ」（『海舟日記』意識）と反対した。勝海舟の「海軍五百年説」といわれる。

それらの反対を押し切つて建設承認を幕閣から取り付けた頃、小栗は幕臣某の「幕府の運命も難しい。これから大金をかけて造船所を造つても出来上がる頃には、幕府はどうなっているかわからない」という反対に、「幕府の運命に限りがあつても日本の運命には限りがない。いずれ土蔵付き売据の榮譽が残せるよ」と答えている。（島田三郎「懷舊談」・『同方会報告』第一号・明治二十八年六月）

売据とは家具付き売家、いまの不動産用語で「居抜き物件」のこと。幕府は終わつても、日本は続く。母屋（政権）が新しい家主の手に渡る時が来ても土蔵（横須賀造船所）付き売家にしておけば、いずれ日本国のために役立つという江戸っ

子の悲痛な洒落であった。

横須賀造船所で人づくり

たしかにモノづくりの基本として人づくりも大切である。横須賀造船所には勝海舟とは関係なく仏人技師長ヴェルニエの手配で、いまの高専や大学理工学部には匹敵する学校「鑿舎」が設置され、慶応二年（一八六六）から開講してフランス語で優秀な職工を育てた。さらに上級の技術幹部を育てる海軍機関学校が明治一〇年代から設けられ、優秀な人材を送り出し、造船技術のみならず日本中の近代工業の発展に貢献してきた。

横須賀造船所の特徴を三つあげれば、

- ① 船だけでなくあらゆるものをつくる総合工場であること
- ② 慶応二年から蒸気機関を原動力としてあらゆる工業製品の生産をしていたこと
- ③ 教育機関を設けて人材育成をしていたこと

この三点から日本の産業革命は横須賀造船所から始まったと見てよい。たんなる軍艦製造所ではない、当時のアジアにおける最大最先端の総合工場、もちろん「日本近代工学のいっさいの源泉」（司馬遼太郎『三浦半島記』）であり、横須賀は「日本のマザーマシン（あらゆる工業生産の始原の機械）」だったのだ。今は造船をしていないが、幕末に小栗上野介が「外国から船を買っても、造れなければ壊れたら修理ができない」という

小栗貞雄父子が東郷邸を訪ねた時の写真はないが、東郷は記念に書を小栗家に贈っている。平成九年（一九九七）春に曾孫小栗忠人から「これを見てもらえば、曾祖父の名誉回復になるから——」と東善寺に寄贈されたその書額が、東郷が遺族に謝辞を述べた史実の大事な証拠となっている。改めて書額を見直すと東郷の言葉の重みと、「西軍に殺され逆賊とされたまま、いまだ名誉は回復されていない」とする子孫の思いに感慨深いものがある。

江戸無血開城という「勝海舟神話」

勝海舟は江戸城無血開城で江戸を救ったという話になっているが、西郷は後述する「山岡鉄太郎との駿府会談」で、ほかの条件は応じるが、「慶喜の身柄を備前藩に預けることだけは君臣の道から同意できない」と山岡に強く反論され、基本的に「慶喜の助命」を考えていた。さらに、西軍参謀木梨精一郎と渡辺清が使者となって英国公使パークスに、江戸攻撃で傷病兵が出たときの病院の支援を依頼したところ、パークスは激怒し「恭順を申し出ている者を攻撃するなど、万国公法に反する」「戦争になることを外国公館に何も知らせず、外国人保護の警護兵も出さないのは、無政府の国のこと」と追い返した。渡辺からその報告を聞いた西郷は、これはとても実行できない、この「パークスの圧力」を利用して朝廷や西軍の対慶喜強硬派を抑えられると考えていた。

信念で建設した横須賀造船所の技術は造船大国日本を生み出し、今も米海軍横須賀基地の中で、米艦や海上自衛隊艦艇の修理部門として継承されている。

では勝海舟はどうか。「人材が先だ」と反対しておきながら、生き残った明治以後に人材育成に貢献したという話は聞かない。彼が「五百年かかる」とうそぶいて造船所建設に反対したハツタリを知らない一部の人たちから、明治以後「海軍の父」と呼ばれたのは見当違いの皮肉な敬称と言える。

江戸城開城のほんとうのお膳立ては、山岡鉄太郎が將軍慶喜の命を受けて駿府で西郷との直談判を行ない、西郷が慶喜の恭順を真意として受け入れる基本合意がなされていた。その後の江戸薩摩藩邸での西郷と勝の会談は最後の確認に過ぎない。とくに「山岡鉄太郎は勝が派遣した」という通説は誤りである。

山岡鉄舟研究会によれば、実は慶喜は恭順の真意を伝えて高橋泥舟に使者を命じたが、泥舟は將軍警護隊長で御側を離れるわけにゆかないと、義弟の山岡鉄太郎にその役を回した。勝海舟はそれまで山岡との面識はなかった。

海舟はそのことをこう書いている。

「五日 旗下山岡鉄太郎に逢ふ。一見、其為人に感ず。同人申旨あり、益満生（益満休之助）を同伴して駿府に行き、参謀西郷氏江談せむと云。我れ是を良とし、言上を経て、其事を執せしむ。西郷氏江一書を寄す。」（『海舟日記』）

「……それで山岡鉄太郎が静岡へ行って、西郷に会うというから、おれは一通の手紙をあげて西郷へ送った。山岡という男は、名前ばかりはかねて聞いたが、会ったのはこの時が初めてだった」（『氷川清話』）

山岡も同じく勝とは初対面であると書いている。「……当時軍事総裁、勝安房は、余素より知己ならずと雖も、曾て其胆力あるを聞く。故に往て之を安房に謀る。安房は余が粗暴の聞こえあるを以て、少しく不信の色あり」（『談



▲横須賀製鉄所（明治初年）左が富岡製糸場のモデルとなった製綱所（東善寺蔵）



▲東郷の書額「仁義礼智信 壬子夏爲 小栗又一君 東郷書」（東善寺蔵）



▲「魯寇之跡碑」対馬芋崎浦

発端はイギリス軍艦の侵航

この事件の発端はイギリス海軍に責任がある。ロシア艦侵航の二年前の安政六年（一八五九）四月と十一月、二度にわたってイギリス艦が対馬に不法に侵航し、測量や上陸をして水や食料を要求、白嶽に登るなどした。日英・日露で「嵐などの避難を除いて、定められた港以外に入港をしない」とした条約に違反する行為である。

公使オールコックから幕府への提案でイギリス軍艦が派遣されてロシア艦は退去した、……という通説になっている。（日付はすべて和暦で表記。露暦は二十四日、西暦は二十六日をプラスする）

「西郷は、おれが出したわずか一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷まで、のそのそ談判にやってくるとは……」「さて、いよいよ談判になると、西郷は、おれのいうことを一々信用してくれ、その間一点の疑念もはさまなかった」（『氷川清話』）

駿府での山岡と西郷の交渉のあとの有名な絵、「江戸薩摩藩邸における西郷と勝の会談」には山岡も同席していたのだが、なぜか山岡は描かれず二人だけの会談の絵となって勝海舟の手柄話を補強している。昭和十年画家結城素明がこの絵を描く時、山岡家は画料を出さなかったので鉄太郎が省かれたといううがった話もある。写真ではなく絵であるから、史実と異なる画面はいくらでも描ける。



▲山岡鉄舟
（福井市立郷土歴史博物館蔵）

判筆記

といかにも、自分一人の手柄のように語って山岡の功績は一切語らず、みずから「神話」に仕立てている。「勝の性行を忌憚なく言えば細心で豪気を銜い、名誉心に焦がれ、反対者を威服又は懐柔するの手腕を有し、筆に口に自己を宣伝するの癖がある」（文倉平八郎『幕末軍艦咸臨丸』中央公論社・一九九三年／一九三八昭和十三年初版）という人物の癖がここでも発揮されている。

小栗上野介が残した土蔵（横須賀造船所）は本当に日本を救っていた。でもほとんどの日本人は勝海舟が江戸を救ったというホラ話だけを知っていて、小栗上野介が日本を救ったスケールの違う真の業績に気づいていない。

対馬事件の通説の誤り

対馬事件とは

文久元年（一八六一）二月、ロシア軍艦ボサドニツクが対馬の浅茅湾に不法に侵航し滞泊を続けた事件。反発した島民とのトラブルから農兵が射殺されるなど殺傷事件も生じた。艦長ビリレフは船の修理という口実から土地の租借へと次第に要求をエスカレートさせた。前年十一月に遣米使節から帰国し外国奉行となっていた小栗忠順は、「見回り」視察」を命じられて対馬へ行くが退去させられず江戸へ戻った。英国

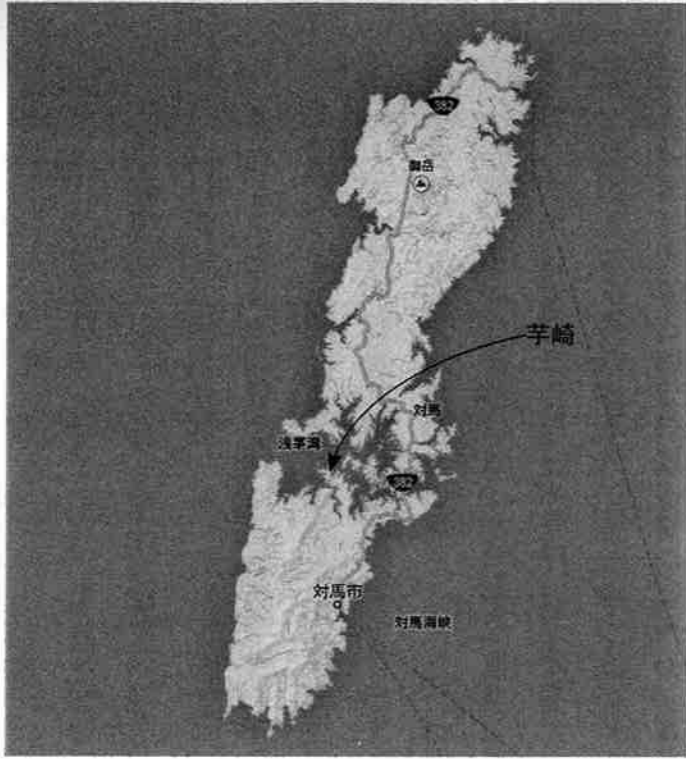
この情報にロシアが焦った。箱館のロシア領事ゴシケヴィチは、英国は対馬を抑えようとしているとロシア外務省に報告した。北京のロシア公使イグナチエフも、英国が対馬を狙っているロシア東洋艦隊リハチヨフ提督に伝え、リハチヨフは海軍大臣コンスタンチンに報告した（文久元年露艦ボサドニツクの対馬占拠について「欄津正志」。その報告を受けてコンスタンチンは皇帝の前で、対馬にロシア艦を派遣してそのまま居座らせ、既成事実の積み上げと「海軍の私的交渉によって」対馬の大名（藩主宗義和）から基地を租借する計画を提案した。

外交抜き、海軍だけでやる

列席していた外務大臣ゴルチャコフは、そういう居座りし既成事実化し対馬藩とロシア海軍との私的交渉で土地を租借に持ち込むような粗雑な計画は、必ず日本政府（幕府）とのトラブルになるし、日本駐在の欧米外交団から干渉が入るから反対したいが、皇帝アレクサンドル2世の弟である海軍大臣コンスタンチンに皇帝の前では正面から反対しにくいので、外交抜きで海軍だけでやってくれと上手にかわした。

◆海軍大臣コンスタンチンから

東洋艦隊リハチヨフ提督宛の書簡によると「……外務大臣ゴルチャコフは、この問題を……海軍の問題にする、……あなたに一任すると話を結びました。私は



▲対馬図



▲芋崎浦・ロシアが掘った井戸の跡

通説では英・露の軍艦どうしのらみ合いで露艦がスゴスゴ引き下がった、あたかも劇画のようなイメージで語られてきた。しかし、もし艦長ビリレフが、英艦が来てホープ中將から退去を強く勧告されただけで戦いもしないうちにリハチヨフ提督の命令や許可なしに退去した場合、軍隊組織であるから間違いなく任務放棄や命令違反を問われ軍法会議にかけられよう。ビリレフにすれば、英艦だって二年前に不法に侵

通説「露艦ポサドニックは誤り 英艦が行ったから退去」は誤り

艦長ビリレフは組織の末端

こうして対馬事件はロシア海軍独断で企画され、海軍大臣コンスタンチン→リハチヨフ提督→末端のポサドニック艦長ビリレフが命令を受けて起こした事件といえる。露艦ポサドニック艦長ビリレフは組織の末端

もちろん、この展望を非常に喜び、ベターだとすぐに同意しました。それ故私はあなたに手紙を書きます。この問題は外交的条約ではなく、海軍の私的契約という性格を持たなければなりません。問題は我々がこの島に海軍の基地、自由港を設立できるかどうかということであります。そのためには、どのような外交も必要ではありません。あなたが、対馬当局との地方的交渉に限定できるか、あるいはあなたの交渉もなしに既成事実を積み上げる方がよいでしょう……」(岡山大学安田孝一編著『文久二年の対露外交とシーボルト』)

海軍大臣コンスタンチンは外交抜きでやる、外交が口出ししないほうがやりやすいと単純に喜んで、既成事実の積み上げや(幕府との交渉にならないよう)対馬当局との地方的交渉に限定して実行するよう「あなたより上手にやれる人はいない」とリハチヨフをおだてあげて指令した。コンスタンチンは、藩ごとに自治権を有していた幕藩体制の盲点を突こうとしたのである。

ニツク艦長ビリレフ個人の思いつきの侵航ではなく、ビリレフはあくまでも命令を受けた末端だから、ロシア艦ポサドニックを退去させるにはこのラインの上部から退去命令を出さなければならぬ。外国奉行小栗忠順が対馬に派遣された役目は「見回り」で、藩主を越えて交渉しあるいは幕府を代表して決定する権限はない。ロシア海軍組織の末端をいくら突いても退去するはずがないと判断し、ロシアの上層部とのハイレベル交渉で退去させるべきという見解で江戸に戻った。二週間の対馬滞在、ビリレフとの三回の交渉だけで露艦を退去させられずに江戸に戻ったと単純に非難するのは当たらない。



▲ロシア艦ポサドニック艦長ビリレフ (『半井桃水と樋口一葉と日露戦争の時代』友納徹著より)

航・上陸したじゃないか、と言いたいたところでもある。

だからこの通説は、明治中期以降に中国大陸で日本がロシアと対峙するようになり、英国がロシアとの対抗上日本を支援した、当時の日本の「イギリス寄り」の風潮を背景に確立したのではないかと考えられる。

六月十日、幕府の指示に従って箱館奉行村垣範正がロシア領事ゴシケヴィチに抗議し、ロシア艦の退去を要求した。この抗議は、海軍だけでやるはずと高みの見物を決め込んでいたロシア外務省関係者を傍観者でいられなくした。領事ゴシケヴィチは「言わんこっちゃない」と舌打ちしながら動き出したことだろう。

その結果、リハチヨフ提督は箱館領事ゴシケヴィチから幕府の抗議と江戸における欧米外交団の不評反発を伝えられ、またシーボルトからも同様の情報を伝えられ、今回の強引な計画は当初の見込み通りにはいかないとわかり、撤退を決意したのが六月末のこと。七月九日と十日に江戸で英国公使オールコックとホープ中將が外国掛老中安藤信正

や若年寄酒井忠毗に英艦派遣を提案する以前に、すでに露艦ポサドニツクの退去は決定していた。七月十二日にはリハチヨフから箱館領事ゴシケヴィチに「退去に同意し、露艦を対馬に差し向けた」と返信が届いている。

しかしながら当時の通信手段は退去命令書を船で運ぶしかない。船の都合も天候もあるから命令書が対馬に届いたのは、英艦のホープ中将が対馬に着いてビリレフに退去を勧告した三日後であった。

英艦のホープ中将が対馬に着いてロシア艦長ビリレフに退去を勧告したのは七月二十三日。しかしビリレフは応ぜず、三日後にリハチヨフ提督からの退去指令が届いてもまだすぐには退去せず、実際にロシア艦ポサドニツクが対馬を退去したのは八月十五日であった。ホープの勧告から二十三日後の退去では、とても「英艦が行ったのでロシア艦が退去した」とは言えない。通説は誤りである。

英艦のホープ中将が露艦長ビリレフに退去を勧告した後、ホープがさらにオリガ港（ナホトカの北東、日本海に面した港）まで出向き、留守だったリハチヨフ提督宛に退去勧告の手紙を残したのは、小栗と同じくロシア海軍上部からのビリレフ宛の退去命令が必要と判断しての当然の行動である。明治以来の史家がこういう軍隊組織の基本に触れず、単純に「小栗は露艦を退去させられなかった」としてすませてきたのは小栗を逆賊とした薩長史観による不見識といふべきか、怠慢と

この二つは別の話で、勝の談話には英国軍艦の派遣は出てこないのに、ごちゃ混ぜにして勝海舟の手柄話に発展させてしまっている。別の話を都合よくくっつけ、なんでも勝海舟の手柄にする、これも「勝海舟神話」の一つである。

検証すると、「オールコックに頼み込み、退去させた」とする勝の談話は後世の虚言と言われても仕方がない。

1、もし勝が頼んだとするとそれはいつか

「当時長崎に居た英国公使オールコック」は、この文久元年四月二十三日に長崎を発して下関まで徒歩旅行し、下関へ船で、兵庫、兵庫から再び徒歩で東海道を経て五月二十七日に江戸に着いている。したがって勝の働きかけは四月二十三日以前でなければならぬ。しかし長崎滞在中にオールコックがこの問題で動いた形跡はない。「露国公使（イグナチエフ）に掛合ってもらって……わけもなく……引き払わせてしまった」なら、三ヶ月も経過した七月九、十日にオールコックが江戸であらためて英艦派遣を外国掛老中安藤信正に提案する必要はない。

2、「内密に頼んだ」は、証明する必要がない話

「内密」の話は反論のしようもないから語り手に都合のいい話となる。

いふべきか。

勝海舟の介入は後世の虚説

ところがさらに「英艦が抗議して露艦が退去した」という従来の通説に沿って、その英艦は勝海舟の斡旋で派遣されたという話が付きまとう。勝がこの事件について以下のように談話がその根拠である。

「……『さあここだ、……かういふ場合こそ、外交家の手腕を要するといふものだ』として懇意にしていた長崎に居た英国公使オールコックに内密に頼み込み、北京駐在の英国公使から直に露国公使に掛合ってもらって、『わけもなく露西亜をしてたうたう対馬を引き払わせてしまった』……これがいはゆる彼に由りて彼を制するといふものだ」……」（勝海舟『水川清話』）

このハッタリのきいた談話が一部史家に信じられ、「勝海舟が内密に英国軍艦を頼んでロシア軍艦を退去させた」という通説になっている。しかし、

- ・勝の談話によれば——勝は長崎の英国公使オールコックへ北京の英国公使へ北京の露国公使によってわけもなく外交だけで退去させた（ロシア艦が退去した）話となるが
- ・史実では——英国公使の提案を安藤老中が承知したので英国軍艦が対馬へ行き退去を勧告している（ビリレフは拒否したが）。

七月九日の英公使オールコックらと老中安藤との会談に勝海舟は同席していない。この会談で、外国人との交渉には目付が同席する幕府の慣例にオールコックが抗議して、目付を退席させているくらいだから、たとえば一部にある「内密に屏風の裏に勝海舟がいた」などとする説も通らない。歴史を語るのに「内密」や「極秘」を駆使し、あるいは「推測」に「憶測」を重ねて自説を都合よく展開するのは信用できない。

3、露国外務省は傍観者——釘を差されたイグナチエフ公使

既述のように今回の露艦の対馬侵航滞泊は露国海軍の独走で行なっている。外務大臣ゴルチャコフは以下の書簡のよう

にこの問題に露国北京公使イグナチエフを巻き込むことに反対している。

◆海軍大臣コンスタンチンからリハチヨフ提督宛書簡「外務大臣ゴルチャコフは、この問題を誰に任せてよいかはつきり判らないと言ひ、イグナチエフに任せることを欲しない」と断固として言いました。この席で彼はイグナチエフをこの問題から解放するように私に願ひ、この問題を外交問題としてではなく、純粋に海軍の問題にする、それ故に問題をあなたに一任すると話を結びました。私はもちろん、この展望を非常に喜び、ベターだとすぐに同意しました」（『文久元年の対露外交とシーボルト』）

基本的にロシア外務省は傍観者の立場だから外務大臣ゴル

チャコフは外交の基本がわかっていない海軍将校出身のイグナチエフ公使が軽率に動かないよう釘を刺したのだ。こんな粗雑なやり方に外務省が巻き込まれるのはごめん、という立場だ。だから英国公使がふだん利害が衝突することが多い露国の北京公使イグナチエフに掛合った程度で、釘を刺されているイグナチエフがすぐに応じて解決できたとする勝の話は無理がある。

4、海軍大臣からの命令系統下にいる露艦長ビリレフ

英艦のホープ中将が強硬に抗議・勧告してもビリレフがすぐに退去しなかったのは、上官リハチヨフ提督からの撤退命令がなければ動けない末端の立場だからである。勝海舟が「露国公使に掛合ってもらって……わけもなく……引き払わせてしまった」というほど簡単にゆくものではない。「外交は口出ししないから、海軍だけでやってくれ」と外務大臣ゴルチャコフが言っているのに、なんで外務省筋の露国北京公使イグナチエフが口をだすのだ、とリハチヨフ提督にはねつけられるはずである。これに関して近年、「勝海舟神話」を補強して

「イグナチエフは全権公使で軍事指揮権を有している。リハチヨフ提督に（退去）命令を出せる」（上垣内憲一『勝海舟と幕末外交』中公新書・二〇一四年）とする説が出た。しかし基本的に在北京ロシア公使イグナ

として、対馬を紅海からアデン湾への出口にある英領の小島ベリム島にたとえて英領とすべきという。

また、英国公使オールコックは外務大臣ラッセル宛に対馬事件さなか（文久元年六月二十六日付）にやはり「対馬を英国が支配すべき」とする、ぶっそうな報告をしている。

◆英国公使オールコックから

外務大臣ラッセル宛報告書

「予は露国が着手する数年前に、他の西欧強国が同島に先鞭を著けずして放置したるを奇異に感ずるものである」「露艦の不法を詰って退去を迫り、若し露艦がこれを拒む場合は、英国自身がこれを占領すべきである。その手段としては、日本政府に条約履行の保証と大坂・兵庫の開市開港とを要求し、これを容れざる時は、従来の条約違反に対する賠償として、割譲せしむべきである。……日本国には露国の野望を防止する実力はない」（大塚武松『幕末外交史の研究』宝文館出版・昭和四十二年）

改めて言うまでもないが、「他の西欧強国が同島に先鞭を著けずして放置した」対馬は無人島ではない。れっきとした日本人が住む領土である。しかしオールコックら西欧強国から見ると、必要とあらば自国の支配下にして当然の「放置された島」となるらしい。現代なら侵略略奪とされる行為が、当時の欧米列強国外交官にはごく普通の行為とされていたことがわかる。

チャコフは英国が対馬を狙っていると警戒して、提督リハチヨフに報告した当事者であって、この事件そのものがイグナチエフの報告から始まっているとも言えるのに、英国公使が言うからと簡単に退去に同意して動いたとしたら、イグナチエフはとんでもない「マッチ・ポンプ男」となる。

じつさいに、事件後のリハチヨフ提督からコンスタンチン海軍大臣あて報告書（一八六一年十二月付）を確認しても、イグナチエフ公使の名前はいつさい出てこないし、勝の言うような展開の話もない。

5、「後門の狼」英国に依頼する危険な越権行為

当時イギリスは、基本的に対馬を支配下に置くことを考えていた。たとえば、在箱館の英国領事ホジソンは『長崎箱館滞在記』で対馬について次のように「対馬を支配下にすべき」と書いている。

◆英領事ホジソン『長崎箱館滞在記』

「われわれにとって肝要な点は、疑いもなく対馬島を視界に入れることである。同島はどんな軍艦にも役立つ左右に出口を持ったすばらしい港を持ち、木材や水があり、われわれを歓迎してくれる住民は、この上なくもてなしがうまい民族で氷に覆われた満州と中国の絹生産地を結ぶ大そう優雅で重宝なはね橋の役を果たす」「吾人（英国）の急務は対馬をベリム島となすにある」（ホジソン『長崎箱館滞在記』）

大坂・兵庫の開港が遅れていることを条約違反と（インネンをつけて）言い立て、賠償として対馬を割譲させるというが、そもそも英艦が対馬に寄港し上陸までしたことが条約違反なのに、その賠償はするつもりもない。露国が野望だというなら、英国だって野望である。

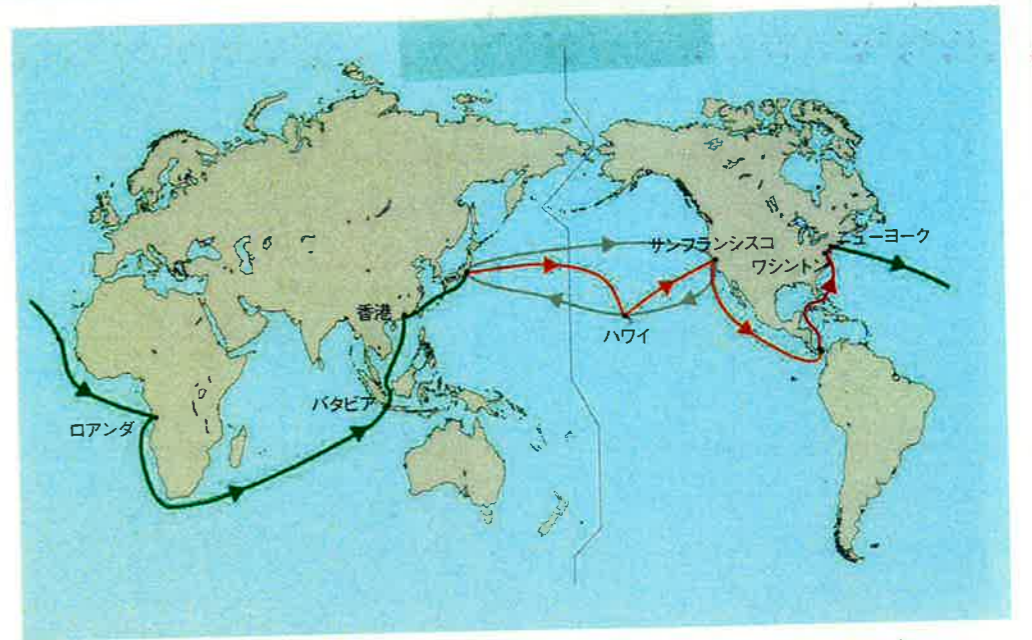
こういう思考を持つ英公使オールコックの提案に乗って、外国掛老中安藤信正、若年寄酒井忠毗が対馬への英艦派遣を承諾してしまったことは、きわどい措置であったことがわかる。小栗も箱館奉行村垣範正もこの会談結果を聞いて「前門の虎を追って、後門の狼を招くようなことはすべきでない」と猛反対している。

もし勝海舟が本当に勝手に、「懇意にしていた」危険な人物オールコック公使に「内密に」頼み込んでいたら、ホラ話ではすまない軽率かつ危険な越権行為であった。オールコックの提案と勝海舟の話は内容が異なっていて関係がない、自作の「勝海舟神話」であることを改めて確認しておく。

遣米使節の業績を隠した「咸臨丸神話」

幕末の太平洋横断に関して日本人は、なぜ遣米使節を知らず、勝海舟・咸臨丸（だけ）を知っているのか。

一般に日本人の間では、咸臨丸について「日本人初の太平洋横断」と「日本人だけで航海した」という二つの虚構が喧



▲遣米使節の世界一周行程図 赤線が往路、緑線が帰路。灰線は咸臨丸

伝され、それがそのまま史実と錯覚されて「咸臨丸神話」となっている。その錯覚の根源をたどると、大正七年から昭和二十年までの国定教科書、それも歴史でなく修身の教科書に行きつく。

遣米使節と咸臨丸は別行動

二〇〇八（平成二十）年に小栗上野介顕彰会（高崎市）が明治大学博物館で都内初の「小栗上野介展」を開催した時、パネル掲示した遣米使節行程図で、渡米し世界一周で帰国した遣米使節に比べ、サンフランシスコ→日本を往復しただけの咸臨丸に驚いた多くのことから、「これ本当ですか！」と質問

要である。

虚構1、「日本人初の太平洋横断」

勝海舟は「軍艦として」（『氷川清話』）と書いている。つまり軍艦以外では日本人初の太平洋横断者が別にいることを承知している。

それは咸臨丸より二百五十年前の慶長十五年（一六一〇）、徳川家康の命で田中勝介が太平洋を横断しメキシコへ渡り、三年後に伊達政宗が派遣した支倉常長一行が太平洋を横断しメキシコ→スペイン→ローマ法王に面謁、太平洋→日本と、五年がかりで帰国している。

勝海舟はこの歴史を知っていて「軍艦として」と断りを入れたのだろう。いずれあとでこんな断りはすつ飛ばして「日本人初の太平洋横断」だけが使われるはずと計算していたとしたら、これはもう確信犯と言える。

虚構2、「日本人だけで航海した」

咸臨丸には幕府から頼まれて乗っていたアメリカ海軍ジョン・マーサー・ブルック大尉以下十一名の水兵が、船酔いで動けない日本人に代わって嵐の海をほとんど乗り切ってくれた。動けた日本人は二、三人。その一人がジョン万次郎で、通訳として乗船し、アメリカで一等航海士の実力を身に付けていて、ブルック大尉の指示を的確な日本語に訳して伝えたので、日本人も実地の航海に馴れていた。咸臨丸の実態を見るとブルックとジョン万次郎、そして二人を乗船させるこ

されたのが印象的だった。ほとんどの日本人が「遣米使節は勝海舟による咸臨丸で渡米した」「勝海舟が遣米使節」（傍線部は錯誤）と錯覚しているのだ。

まず、遣米使節は咸臨丸と別行動で咸臨丸には乗って行かなかったことを、念のため確認しておこう。

◆遣米使節は正使新見豊前守正興、副使村垣淡路守範正、目付小栗豊後守忠順の三名で、三使・三公と呼ばれた。それに随員・従者を合わせ七十七名が渡米した。コースは日本→（米艦ポウハタン号）→ハワイ→サンフランシスコ→パナマ。（運河はまだなかったのでパナマ鉄道）→アスペンウォール→（米艦ロアノウク号）→ワシントン→ボルティモア→フィラデルフィア→ニューヨーク→（米艦ナイアガラ号）→大西洋→アフリカ・ロアンダ→インド洋→インドネシア（バタビア）→香港→日本と、米艦三隻を乗り継いで世界一周した最初の日本人と言える（漂流して救われ、偶然世界一周した漁師は別として）。

◆咸臨丸はこの遣米使節の護衛を名目とした航海練習船として、日本→サンフランシスコ→ハワイ→日本と、往復航海した。

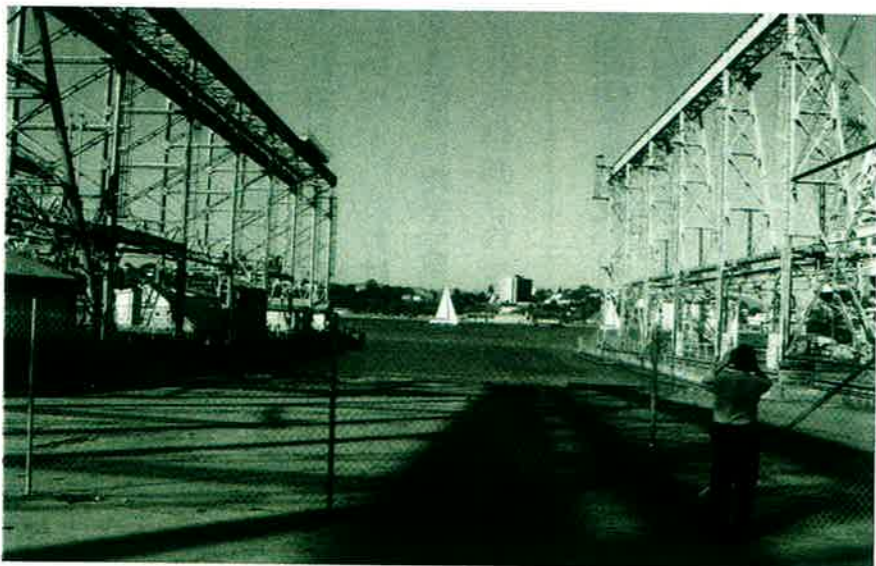
咸臨丸の虚構二つ

*「勝海舟」：渡米時は勝麟太郎だったが勝海舟で統一表記する「咸臨丸神話」の基になっている二つの虚構には注意が必要。とに苦心した軍艦奉行木村撰津守喜毅の三人がさわやかな物語を形成している。ブルックらが乗っていなかったら、咸臨丸は北太平洋の荒波に吞まれていたことだろう。帰国に際しても五人の米水夫に同乗してもらっている。では勝はどうしていたか。

寝たぎりの勝海舟

近年のテレビや映画で、咸臨丸の太平洋横断航海が出ない、あるいは勝海舟が活躍する場面が描かれないことにお気づきだろうか。

五十七年前の昭和三十六年に遣米使節百年記念でブルック大尉の「咸臨丸日記」が公刊（『遣米使節資料集成』



▲咸臨丸を修理したメーア島の海軍造船所跡

第五巻・風間書房)された。ブルック大尉の日記によると「勝麟太郎は寝ている」「今日も寝ている」「卵とスープを持って見舞いに行ってみた」といった状態で、サンフランシスコに着くまでに甲板に上がってきたのは三回だけ。それも「まだ足元がおぼつかない」と書かれている。

木村喜毅の記録ではしじゅう不機嫌で、太平洋の真ん中で「俺は江戸へ帰る、バッテリー(ボート)を下ろせ」とわめいたとのこと。とにかく「教授方取扱」という役目にふさわしくない、シーマンシップのかけらもない状態であった。

サンフランシスコ入港に際して、勝が勝家の旗を取り出して掲揚させようとしたところ、これまでの言動に腹を立てていた乗組員が軍艦奉行木村家の旗をあげるべきと言い、ブルック大尉の裁定で勝は艦長格、軍艦奉行はその上の提督にあたるからとなって、木村家の旗を掲げて入港した。

勝海舟の名誉のために言えば、米兵に「日本人の衣服は木綿で、濡れた時に身体を冷やす」と指摘され、サンフランシスコで濡れた布団を捨てさせ、買い込んだ毛布を支給したのは適切な処置だった。お金はたぶん木村喜毅の懐から出ていたことだろうが――。

たしかにウールは繊維に断熱効果が高い空気層を含むから、濡れても温かい。私もかつて女子高山岳部を引率して夏の飯豊山で暴風雨に遭い、ずぶ濡れの寝袋は使わずセーターを直接肌に着させて切り抜けたことがある。濡れたウールの

◆遣米使節任命書

己未九月十三日

新見豊前守

村垣淡路守

小栗又一

亜墨利加国へ使差遣候節新見豊前守正使村垣淡路守は副使小栗又一は立合之心得ニ可罷在事

(アメリカへ派遣するに際し、新見豊前守正使、村垣淡路守範正は副使、小栗又一は立合(目付)として勤めること)

《幕末維新 外交史料集成 第一巻「禮儀門」P二三五》

このほかに副使に任ぜられたものはいない。

「正使の代理役だから副使」説は誤り

では「木村撰津守喜毅は使節に万一の時の代理役だから副使と同格」とする説はどうか。

正使・副使に万一の時の代理役についてはこの後追加の指令があつて、その内容は次の(一)～(三)の三人となる。

(一)、小栗豊後守忠順 「目付小栗又一は正使・副使に支障があつた時は一人でも代行すべし」という下知があつた。

○外国奉行下知状案

奉行 (…外国奉行新見と村垣が不調の場合は小栗又一忠順が代理を務める、とまず奉行の両名に伝えた)

ズボンも、門内小屋に避難しているうちに水分が押し出されて乾いていった。

日記が公刊されて半世紀たったから航海中寝たきりだった勝の話はすっかり浸透し、どんなに勝びいきの作家や脚本家でも咸臨丸で勝が活躍する画面は描けなくなったから、先年のNHK大河ドラマ『龍馬伝』でも「俺はアメリカへ行ってきた!日本人になったのだ!」とわけのわからないことを喚いて、過去の話で済ませていた。「咸臨丸神話」が崩壊したということである。

「木村喜毅が副使」説、「副使が乗る船が咸臨丸」説は誤り

咸臨丸に関連して、近年いくつかの本やHP・ブログで、「軍艦奉行木村喜毅は副使」あるいは「正使はポウハタン号で、副使は日本で仕立てた船咸臨丸……と決まった」とする説が広がっている。実際はどうなのか、なぜこういう説が生まれたのか、いつどこから始まったのか――。

副使は村垣淡路守範正一人

史実に照らすと幕府が遣米使節副使として任命したのは、村垣淡路守範正ひとりだけである。

御下知状案

(三行略)

一其方共之内病氣其外万一意外之差支有之節は又一儀老人に而も御使可相勤事

(其の方たちが病氣など万一の支障があるときは又一一人でも使節を勤めさせよ)

◆目付下知状案

御目付 (…同じことを目付小栗又一本人にも伝えた)

下知状案

(四行略)

一、外国奉行病氣其外万一意外之差支も有之節は其方儀老人二而も御使可相勤事

(外国奉行正使副使が病氣など万一の時は其方が一人でもお使いを勤めなさい)

右條々厚相心得外国奉行可申談もの也 (『幕末維新 外交史料集成 第四巻』修好門)

(二)、木村撰津守喜毅 さらに咸臨丸出航(十三日)直前に追加指令があつて、木村撰津守喜毅(咸臨丸)が代理役を命じられている。

◆新見豊前守外二人疾病等ニテ使節勤メ難キ節ハ代リテ使節タルベシト木村撰津守ニ指令

庚申正月九日

木村撰津守江

木村撰津守

今度亜墨利加国江被遣候御使之面々御用中若病氣等に而何も差支え候節者其方御使相勤候心得に而可被罷在候（このたびアメリカへ派遣される使節の面々（三使を指す）が病氣などで支障が生じた場合はその方が使者を勤めるつもりでいるようにしなさい）

（三）森田岡太郎（二）と同時に追加指令で、勘定組頭森田岡太郎（ポウハタン号）が使節（三使）も木村喜毅も支障が生じた場合の代理役を命じられている。

◆同上云々 組頭森田岡太郎二演達スベシト勘定奉行二指令 庚申正月九日

御勘定奉行江

御勘定組頭

森田岡太郎

今度亜墨利加国江被遣候御使之面々並木村撰津守共御用中若病氣等に而何も差支え候節者其方 御使相勤候心得に而可被罷在旨可被申渡候（このたびアメリカへ派遣される使節の面々（三使を指す）並びに木村撰津守も病氣などで支障が生じた場合は其の方が使者を勤めるつもりでいる事を申し渡します）

を乗せるための船という名目で、その副使に軍艦奉行を当てることとした」「別船に乗る副使」「別船を副使の乗る船としたのは：」「正式に遣米副使として咸臨丸に搭乗」としているのが初出と思われる。

「副使の乗る船が咸臨丸」「正使に支障があった場合」としたら、ポウハタン号に乗っている正式な副使村垣淡路守範正や代理も命じられている目付小栗又一を全く無視した話となる。好著と言われる同書になぜこのような記述をしたのだらう。

なぜこの説が生まれたか

一九六一昭和三十六年に『遣米使節史料集成 全七巻』が発刊され、そこに収められた史料、とくにブルック大尉「咸臨丸日記」から咸臨丸の実態が知られると、戦前の修身教科書（後述）の

「勝海舟の願いで派遣されることになった咸臨丸」「日本人だけで初の太平洋横断航海をした偉業・壮挙」「航海中立ち続けてみんなを励ました勝海舟」という「咸臨丸神話」ともいべき勝海舟・咸臨丸の勇ましい虚構イメージが覆ることになった。

もともと修身教科書には虚構の「お話」が含まれるから、歴史ではない。戦後に咸臨丸のメッキがはがれただけのこと。既述のように近年のテレビや映画で勝海舟が咸臨丸で活躍す

以上をまとめると、幕府は

(一)、小栗豊後守忠順 正使・副使に支障が生じた場合は目付小栗又一が代わって任務を果たすよう指示している。

(二)、木村撰津守喜毅 三使（正使・副使・目付）共に病氣等で不都合が生じた場合は、（咸臨丸の）軍艦奉行木村撰津守喜毅がその代理を努めること。

(三)、森田岡太郎 三使（ポウハタン号）も木村撰津守喜毅（咸臨丸）も支障が生じた場合は勘定組頭森田岡太郎（ポウハタン号）がその代理となること。を指示している。

(一)、(二)、(三)いずれも副使という正式な職名は与えていない。

代理だから副使と同等＝副使、とする論理は「副使にした」だけの無理な話。もしこの論理が通るなら、(一)、(二)、(三)の順序でまず小栗忠順が副使と言えることになる。

近年、多くの書籍やHP・ブログで「木村撰津守喜毅が副使」「副使が乗る船が咸臨丸」としているのは誤りである。

「木村喜毅が副使」説の根源はどこから

「木村撰津守喜毅が副使」「別船（咸臨丸）が副使の乗る船」説の始まりは、木村の従者長尾幸作の子孫土居良三著『軍艦奉行木村撰津守』（中公新書一九九四平成六年）に

「咸臨丸は）正使に万一の支障があった場合、代るべき副使の画面が出てこないのも、描けなくなったからである。これ以前の書物に「木村喜毅の副使説」は見られないから、戦前のイメージが覆った咸臨丸の再格上げ復権を図る動きとして出てきたのであらう。

近年刊行された「身内が木村の子孫」という宗像善樹著『咸臨丸の絆』（海文社・二〇一四平成二十六年）でも会話体で

「上様におかれては、木村図書に特別の思し召しがありでござる。それは……別船を仕立て、副使の木村図書を軍艦奉行として差し遣わし、彼の地へ向かわせよ、との御沙汰である」

「これはポウハタン号に搭乗する正使に病氣や不測の事態が生じ、アメリカワシントンへ上ることが叶わざるときは、副使の木村図書が正使となりアメリカ大統領に謁見いたすべし、と御内意によるものでござる。しこうして、木村喜毅は副使といえども正使の新見と同格の御役目を担うことになるゆえ、さよう心得られたい」

……として将軍家茂の内命があったように展開しているが、創作会話の中でのフィクションは史実ではない。このような人事は思わせぶりに「御内意」などと隠し立てする内容ではない。小栗又一の例のようにほかの使節たちが前もって承知しているべきことだから、公式指令がなければ通らない。同書には

「勝麟太郎が『帰国するときもアメリカ人の手助けが必要



▲修身教科書

ではなぜ日本人に咸臨丸と勝海舟(だけ)が知られているのか、調べると戦前の教科書、それも歴史ではなく修身の教科書に問題があった。
学校制度が明治五、六年に始まって以後の教科書の歴史を見ると、

修身教科書が作った 「勝海舟神話」と「咸臨丸神話」

た「咸臨丸の絵」というおかしな構成になっている。
いまの私の目標は中学・高校の歴史教科書や副読本の「遣米使節」の説明から「咸臨丸の絵」を外し、日本産業革命の地横須賀製鉄所を生み出す契機となった遣米使節の「ワシントン海軍造船所見学の写真」を載せることである。

幾多の見聞の中で、ワシントン海軍造船所見学が横須賀製鉄所建設の契機となっていることを挙げておこう。この時の見学記念写真が残っている。堂々と椅子に腰かけた姿はまさに日本のサムライの姿、じつに品がいい。ところが、なぜか現在の中学高校の歴史教科書や副読本で「遣米使節」という項目があっても遣米使節についての記述は二、三行で、あと五、六行は咸臨丸・勝海舟の話になり、説明に使われている挿絵はこの遣米使節の写真ではなく、遣米使節が乗らなかった「咸臨丸の絵」というおかしな構成になっている。

遣米使節の業績を隠す「咸臨丸神話」
アメリカの進んだ文明を見聞体験した遣米使節一行は、フィラデルフィア造幣局では通貨の分析実験を主張し、実験に立ち会ってその場を動かさず、ソロバンを駆使して複雑な貨幣価値の比較計算で日本人の高度な数学と実務能力でアメリカ人を驚嘆させ、人品態度と旺盛な探究心、緻密な工芸品とも言える衣装や持ち物が報道され、一大日本ブームを起している。

だ』といいだして、五名を雇って帰国した……」
ともあるが、帰国に際して案内役の米人を雇う話は前年安政六年十二月段階で「帰国の際も米人を雇う」ことが幕府で決まっていた(『幕末維新 外交史料集成 第四巻』修好門)から、勝とは無関係な、予定通りの行動を勝の功績にし「勝海舟神話」に仕立てようとしていることがわかる。

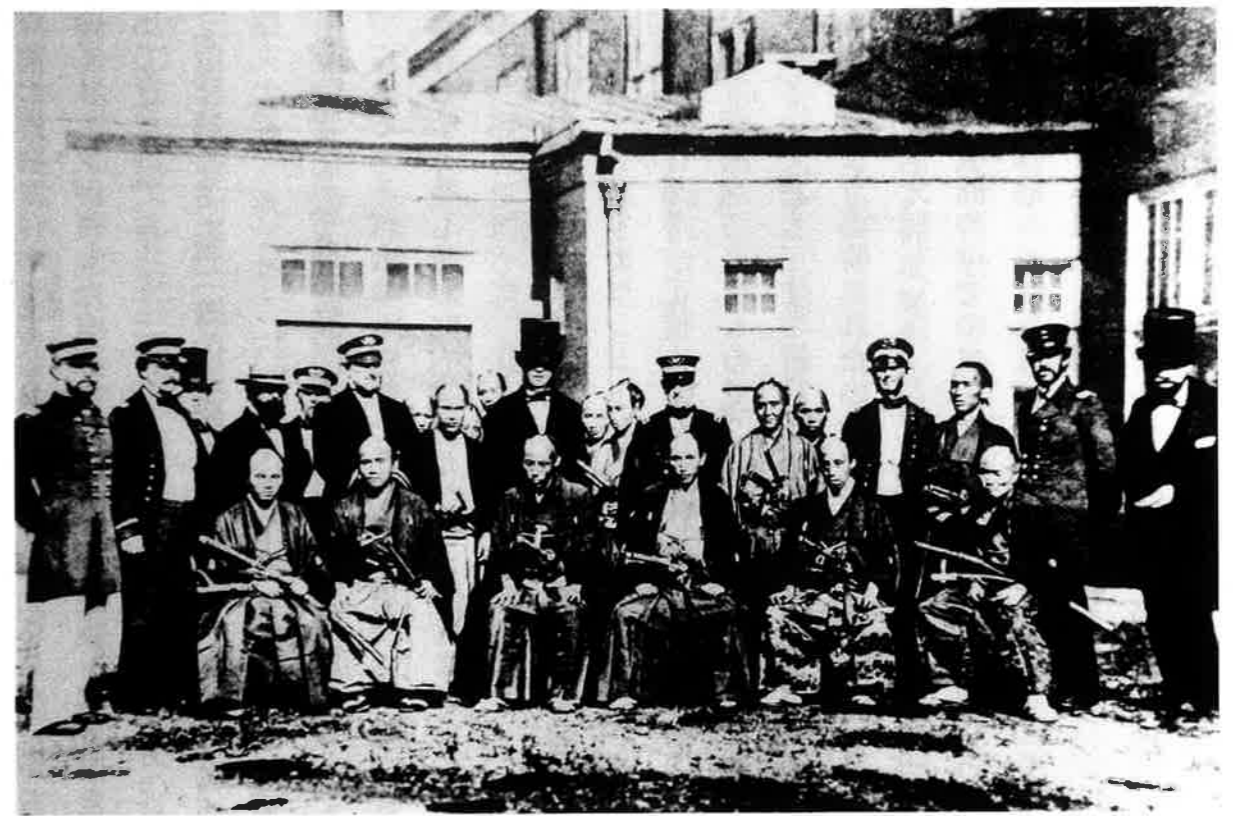
国定教科書

第1期・明治36年～第5期・昭和20年まで (27年間)

| 期(改定) | 歴史教科書 | | | 修身教科書 | | |
|---------------------------------|-------|-----|-----|-------|---------------------|----------------------|
| | 遣米使節 | 勝安芳 | 咸臨丸 | 遣米使節 | 勝安芳 | 咸臨丸 |
| 第1期 (明36年～) | 記述ナシ | ナシ | ナシ | 記述ナシ | ナシ 「勉学」 リンコルン | ナシ 「勇気」 高田屋嘉兵衛 |
| 第2期 (明43年～) | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ 「勉学」 新井白石 | ナシ |
| 第3期 (大正7年～) | ナシ | ナシ | ナシ | 少々 | 「勉学」 勝安芳の話 A型 | 「勇気」 咸臨丸の話 C型 |
| 第4期 (昭和9年～) | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | 「勉学」 勝安芳の話 A型 | 「勇気」 咸臨丸の話 C型 |
| 第5期 (昭16年～ 昭和20年 敗戦まで) | ナシ | ナシ | ナシ | ナシ | 「勉学」 勝安芳の話 B型 | 「勇気」 咸臨丸の話 D型 |

▲国定教科書歴史と修身の変遷 (作図：村上泰賢)

届出制 はじめは届出制で、届ければどの教科書でもよかった。
検閲許可制 明治十六年から検閲を受け許可されたものが使用を認められた。現在と同じである。
国定教科書制 明治三十六年から国定教科書以外は使えなくなった。
この国定の教科書は明治三十六年以来昭和二十年敗戦まで五回改定されている。



▲ワシントン海軍造船所見学 教科書に載せるべき大事な写真である (東善寺所蔵)

歴史教科書を見ると何度改定されても遣米使節・咸臨丸・勝海舟はいつさい登場しない。小学生に日本の歴史全般を教えるのだから細かいことは省いても仕方がないだろう。

ところが修身教科書を見ると、大正七年の第三期改定で、「勉学―勝安芳」が登場し、続く「勇氣―咸臨丸」とが勝海舟セットとなって、昭和二十年敗戦まで教えられていた。日本中の小学生が二十七年間「勉学」で勝海舟の若いころの勉強ぶりを学び、「勇氣」で勇ましい咸臨丸の話を学んでいたのだ。「勝海舟神話」「咸臨丸神話」の始まりである。

この段階までをまとめると、
 ・戦前の日本人は国定の歴史教科書で「遣米使節」「勝安芳」「咸臨丸」をいつさい教えられていない。
 ・戦前の日本人は国定の修身教科書で「勝安芳」と「咸臨丸」の話（だけ）を教えられていた。
 ということになる。

その記憶が戦後の教科書編纂担当の学者によって教科書に移入され、戦後は「歴史教科書」に入り込んで遣米使節と咸臨丸・勝海舟を混同する日本人を現在も生み出し続けている。そしてその誤解が何でも咸臨丸と勝海舟で済ませてしまう。「咸臨丸症候群」とも呼ぶべき風潮を産み出し、結果的に「日本人初の世界一周をした遣米使節」や、日本の産業革命の地・横須賀製鉄所が「遣米使節のワシントン海軍造船所の見学を契機として建設」され日本海海戦で「日本を救った」史実か

い。この本は私が持っていて役に立たないから、あなたに差し上げます、と言って断る安芳に無理に渡してくれた。安芳はこのように学問に励んだので、後にはりっぱな人になりました。」

といういい話。私も若いころ読んで感激した(学校ではない)。ところがこの話は、昭和十六年の第五期改定本では内容が違っている。その違いを表にするとこうなる。

| 《第3・4期》 | ↓ | 《第5期の違い》 |
|----------------------------|---|-----------------|
| 1、書物の種類 オランダの「兵書」 八冊 | ↓ | 外国の辞書一冊 |
| 2、値段 兵書八冊・五十両 | ↓ | 外国の辞書六十両 |
| 3、借金 お金を親類からの借金で | ↓ | 用意親類知人に借金を断られた |
| 4、場所 持主の家に夜に通って写した | ↓ | 借りてきて写した |
| 5、期間 半年で写し終えた | ↓ | 一年以上かかった |
| 6、二冊 兵書をもらって二冊になった | ↓ | 辞書を二冊分写して一冊を売った |

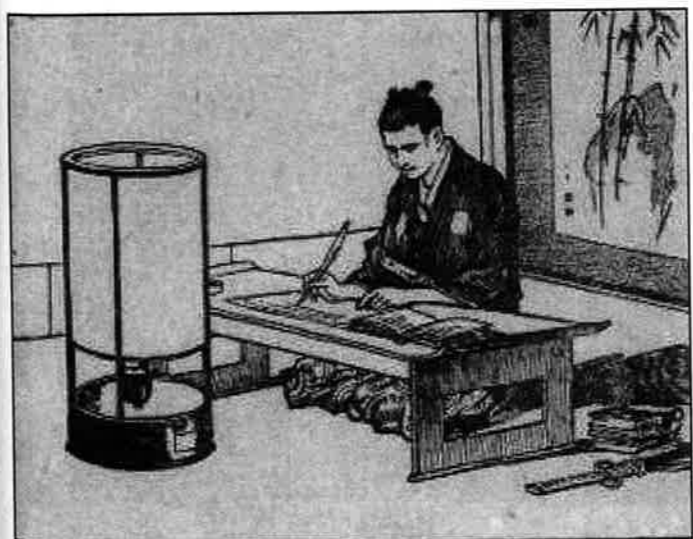
いったいどちらが本当の話だろう。お断りしておくが、私は勝海舟がすごい努力家勉強家であることを否定するものではない。

ら眼を逸らさせている。

修身教科書の問題点「勉学」の勝安芳

第三期改定からの修身教科書の「勉学―勝安芳」の話の概略はこうだ。

「勝安芳は若い時、西洋のほしかった兵書が五十両で本屋にあった。親類などから金を借りて本屋に行くと本はもう売られていた。買った人を聞いて、その家を訪ねゆずってほしいと頼んだが断られた。では貸してほしい、写させてもらおうと言うと、それも断られた。では、あなたが夜寝てからお宅で写させてほしい、と頼んで承知してくれたので、雨の日も風の日も毎晩一里半の道を通って半年かかって、八冊の本を写し終えた。本を返す時、意味の分からないところを持ち主に尋ねると、持主は、自分にはそこまではわからない



▲修身教科書の挿絵「勝安芳」

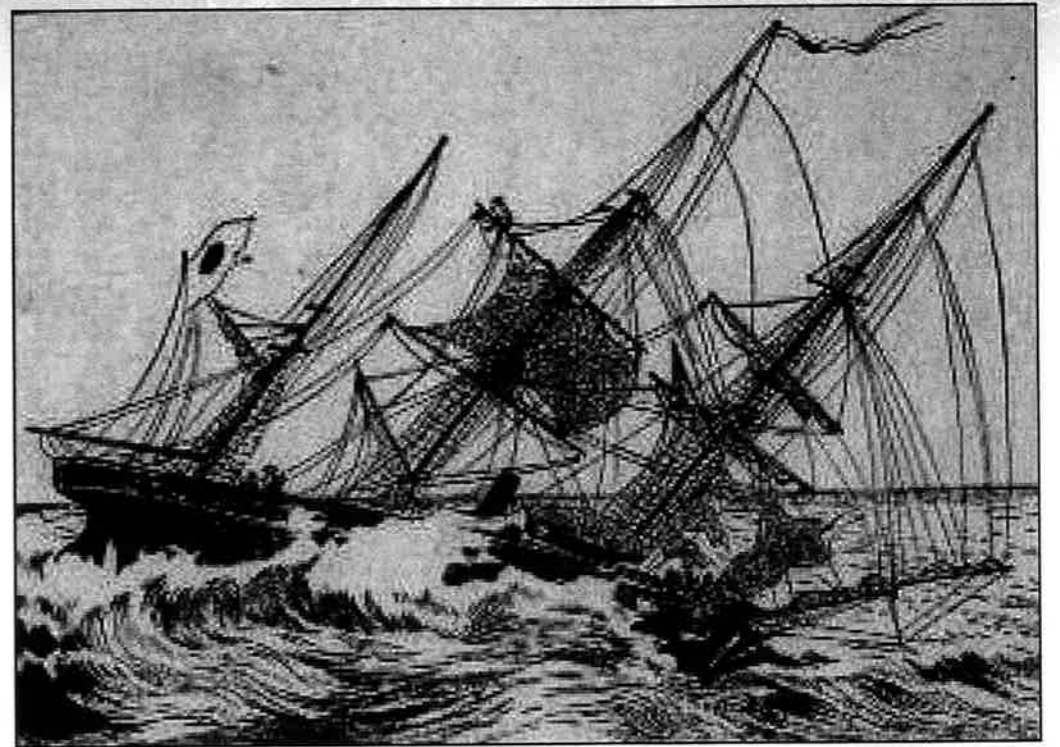
私はどちらかが本当、あるいは両方創作でもいいのだと思う。子供たちが感激してりっぱな大人になろうと努力するようになればいい、修身は歴史ではない「お話」なのだから。ただしこれを歴史に持ち込んではいけない。

ところが、勝安芳の勉学に対する努力という、どうにでも創作できる「お話」を学んだ後に、次の「勇氣―咸臨丸」で脚色誇張された勇ましい太平洋横断（これは史実）の快挙の「お話」を学習した小学生は、疑問を持たずこのセットのお話すべてが歴史の史実と受け取ったに違いない。

修身教科書「勇氣―咸臨丸」の問題点

第三期改定からの「勇氣―咸臨丸」の概略はこうだ。

「安芳は長崎でオランダ人に航海術を学んだ。間もなく、幕府は使をアメリカ合衆国へやることになり、使はアメリカの軍艦にのせ、別に日本の軍艦を派遣する噂があった。安芳はそれを聞いて、自分の教へた部下を指図して日本人の力だけで航海をしたいと願ひ出た。何分我が軍艦を外国へやるのは初めてで、幕府は容易に許さない。しかし、安芳があくまで願ってやまないで幕府も咸臨丸で安芳等をやることに決めた。航海中は海が大そう荒れ、嵐がはげしい時には船体がねじ折られそうになった。安芳等は少しも恐れず、元氣よく航海をつづけ、サンフランシスコに着いた。アメリカ人は、日本人が少しも外国人の助けを受けずに、小さい軍艦で太平



▲修身教科書の挿絵「咸臨丸」 教科書で「遣米使節」の説明から外すべき絵である

洋を越えてきたとたいそう感心しました」

この話を検証すると、以下のようにかなり誇張された「咸臨丸神話」「勝海舟神話」といふべき内容であることがわかる。

とここだけ読むといかにも愛国心をふるい立たせる勇ましく、いい話だが、実際は日本近海で破船して横浜に滞在していた米海軍の測量船フェニモアクーパー号の船長ブルック大尉ら十一名の米海軍水兵に同乗を依頼して出航し、大嵐でほとんどの日本人が船酔いで動けないところを米兵の操船で乗り切ることができた。（ブルック『咸臨丸日記』、斉藤留蔵『亜行新書』などいずれも『遣米使節史料集成』第四・五巻）

この件に関して福沢諭吉が「少しも他人の手を借らずに出かけて行こうと決断した」「決してアメリカ人に助けてもらうということとはちよつともなかった」（『福翁自伝』）と書き、勝海舟が「日本人が独りで軍艦に乗ってここへ来たのはこれが初めてだと言って、アメリカの貴紳もたいそうほめて……」（『氷川清話』）と語るのも誇張で、日本人を誤らせた原因である。勝の文にはトリックがあつて、「独りで……ここへ来たのは初めてだ」と言ったのは「アメリカの貴紳（紳士たち）」だ、俺が言ったんじゃない、と言い抜け出来る文になっている。

三、初の航海は

第三期教科書で「軍艦を外国へやるのは始めて」とする記述は正しい。

勝海舟も「軍艦に乗ってここへ来たのはこれが初めて」と書いている。勝海舟は田中勝介や支倉常長の史実（既述）を

一、派遣の発端は

第三期教科書で「日本人の力だけで航海をしたいと願いました」「安芳があくまでも願ってやまないの……」
第五期教科書も「日本人だけでアメリカ大陸へ行つてみようと考えました」「まことに愉快なもくろみでありました……」と、いかにも勝海舟が「願ひ出ました」「考えました」「願ってやまない」「もくろみ……」と率先提案して実現しようにみえるが、実際は勝海舟の申し出など（あつてもなくても）関係なく、幕府は安政五年の日米通商条約締結の時から随行船の派遣を決定していた。（『幕末維新外交史料集成』修好門 第四巻）

咸臨丸の責任者となった軍艦奉行木村喜毅は

「（勝安芳を）咸臨丸の艦長にするのでも、（勝安芳が）どうか行きたいということですから、お前さんが行ってくればというので、私から計らつたのですが、……」（『海舟座談』）と、勝海舟の乗船は木村喜毅のあつせんで実現したことを回顧している。

二、日本人だけで航海、か

第三期教科書で「日本人の力だけで航海したい」「少しも外国人の助けを受けず……」

第五期教科書でも「日本人だけでアメリカ大陸へ……」
「案内する者もなく」

承知しているから「軍艦として」を付けたのだろう。しかし、いつの間にか「軍艦として」が外され、「日本人初の太平洋横断の勝海舟・咸臨丸」というキャッチフレーズに変化して独り歩きし、日本人の自尊心をくすぐって信じられているのも事実。

四、航海中は

第三期教科書で「安芳等は少しも恐れず、元気よく航海を続け」とするが、咸臨丸の水夫斉藤留蔵の日記『亜行新書』には「日本人はほとんど船酔いで動けず、動けたのは二、三人。あとはみなアメリカ人の力で嵐の中を乗り切つた」とある。ブルックの『咸臨丸日記』はもっと具体的に、外洋に初めて乗り出した日本人乗組員たちは統率がなく、当直制をとらず、気がついたものが仕事を少しする程度で、全くアメリカ人に頼りきつている状況を書いている。ポウハタン号の遣米使節一行もはげしい船酔いに悩まされたのは同様である。

五、船酔いで寝たきりの勝海舟は

第三期教科書で「安芳等は……元気よく航海……」

第五期教科書でも「（出航の時）……しばらくの間は、悲壮な気持で甲板に立ち続けました」「絶えずはげまし続ける安芳……」とあるが、航海中の勝海舟はじつは船酔いのためほとんど船室にこもって寝たきりで、サンフランシスコに着くまでに甲

板まで上がってきたのは三回くらい。まったく艦長（じつは教授方取扱が正式な役名）の役を果たしていない。

ブルックの日記では「艦長は下痢を起し、提督は船に酔っている」「艦長はまだ寝台に寝たきり、提督も同様」「艦長は快方に向かっている。今日スープとブドー酒を贈った。私がキャビンの扉を開けたとき、彼は寝床の上に座っていて、非常に感謝しているようであった。大変静かな人で、私は彼の声を聞いたことがない」「今日、麟太郎艦長が出てきたが、まだ弱々しくデッキには立てない」（ブルック「咸臨丸日記」・『遣米使節史料集成』第五巻）

木村喜毅も「勝さんは船室にこもりきりで、太平洋の真ん中で、バッテリー（ボート）を下ろしてくれ、俺は江戸へ帰る！といった：」（『海舟座談』）と語っている。

その勝海舟が晩年に木村喜毅について、次のように語るのにはハッキリ以上の、人格を疑いたくなる会話である。

「木村（撰津守）が奉行の時、『航海のけいこが、そう短くて、直に帰ってくるようでは、宜しくない。もっと遠くまで行ったらどうだ』と言うから、『そうですか、それではそう致しませう』と言って、木村を乗せて『今日は遠くまで行くのだ』と言ってひどい目に合わせてやった。風が立って、波が荒いものだから、木村が、『ここは何処だ。もう帰っては』と言うたら、『どうしてどうして、ここはまだ天草から五、六里です。これからズット向うまで行くのです』と言うたら

須賀造船所が幕府の遺産となって日本を救った、という歴史の継続性を理解できない日本人を生み出し続けることになる。

もう一度確認しておこう。中学・高校の歴史教科書や副読本の「遣米使節」の説明から遣米使節が乗らなかった「咸臨丸の絵」をはずし、「遣米使節ワシントン海軍造船所見学写真」を載せるべきである。

官は税金を使う

先年の本誌に小文で次のように書いた。

「官」の反対語は「民」のほず。ところが日本語では「官軍」の反対語が「民軍」とならず「賊軍」になつてしまふ。賊軍は―何をしても悪い連中と決めつけるから、反対語の官軍は―何をしても正しい軍隊という意味になれる。そしてここから生まれた官軍意識が明治以後の政府の中心思想を支え、昭和二十年の敗戦まで日本を引きずった。（『会津人群像33』平成二十六年）

明治維新から昭和二十年の敗戦まで、日本は戦争続きの七十七年間だった。そして昭和二十年の敗戦からこれまで七十三年間、日本は戦争をしない国としてやってきたから、東日本大震災も何とか持ちこたえて復興を目指していられた。もしどこかの国と交戦状態だったら、とても復興どころではなかった。国の弱点になる大震災の報道は矮小化され、

『モウヨイ、モウヨイ』と言って大層へドついた（吐いた）よ」（『勝海舟全集』11・海舟座談明治三十年七月三十日）。

咸臨丸に乗る以前の会話ならまだしも、木村のおかげで乗れた咸臨丸航海で醜態をさらした後、晩年になって事情を知らない者に木村をくさしてこう自慢そうに回顧する勝海舟の心根はいかがなものか。「咸臨丸の英雄・海軍の父」勝海舟は、ブルックの『咸臨丸日記』が公刊されてみると、咸臨丸航海で醜態をさらしたあげく、こういうむなし会話をする人物だったとわかる。

戦前の修身教育がすべて問題だというつもりはないが、勝海舟と咸臨丸に関してはかなり不正確、かつ脚色され誇張された「お話」が修身で教えられ、それがそのまま歴史である。と錯覚されてきたことがわかる。その教育の影響は修身教育がなくなった戦後の教科書編纂にも及んでいて、戦後の歴史教科書で遣米使節に触れる際は必ず咸臨丸・勝海舟を引き合いにし、説明に（遣米使節が乗らなかった）咸臨丸の絵を載せている。いまだに続く戦前の「勝海舟・咸臨丸神話」の後遺症であり、たとえば横綱の前に太刀持ち・露払いが立ちふさがって土俵入りを邪魔している図式である。

咸臨丸の絵を教科書から外し、ワシントン海軍造船所見学記念写真を載せないと、日本人は遣米使節の業績を理解できないし、その見聞を契機として生まれた日本産業革命の地横ボランテアが駆け付けるところか、余計なことはするな、知らせるなど規制する法律が作られるだろう。その底流に常に官軍意識が流れていて、官のすることはすべて正しいとする法律がそれを支える。

官は税金を使える。ことし「明治維新一五〇年」として全国各地で税金を使つて行われる行事は、何を目標しているかよく見極めたい。



PROFILE

村上泰賢
むらかみ たいけん

昭和16年（1941）群馬県高崎市。
曹洞宗 東善寺住職。小栗上野介顕彰会理事。群馬県高体連登山部参与。群馬県山岳連盟参与。
著書に平凡社新書『小栗上野介―忘れられた悲劇の幕臣―』（平凡社）。
編著に『小栗忠順従者の記録―佐藤藤七の世界一周』（上毛新聞社）。
共著に『小栗上野介』（みやま文庫）。『幕末開明の人 小栗上野介』（東善寺）。『小栗忠順のすべて』（新人物往来社・平成20年）。『シャルミリ インドヒマラヤCB53峰初登頂の記録』（1980年群馬高校教職員インドヒマラヤ登山隊）。

会津人群像

201
no.3

aizujin **季刊** gunzō

P12 村上泰賢「歴史を語らせている
勝海舟神話・緘臨丸神話」

特集 戊辰150年座談会

真実はこうだ!!

～会津人が語る戊辰戦争～



会津人群像

aizujin-gunzō no.36



国重文 会津さざえ堂

国指定重要文化財 旧正宗寺三匠堂

お問い合わせ先 有限会社 山主飯盛本店

〒965-0003 福島県会津若松市一箕町八幡滝沢 155 番地

TEL 0242(22)3163 / FAX 0242(25)3419



平成30年1月22日発行 第36号
発行人 阿部隆一 発行所 歴史春秋社 〒965-0842福島県会津若松市門田町中野 定価 本体1,800円+税

9784897579184

1929402018002

ISBN978-4-89757-918-4 C9402 ¥1800E